

## 4—13

## 既存骨脆弱性骨折の背景因子について

<sup>1</sup>北整形外科, <sup>2</sup>日本臨床整形外科学会

○北 潔<sup>1,2</sup>

【はじめに】転倒および骨折が高齢者の生活を大きく脅かすきっかけになりうるが、意外なことに骨折リスクを包括的に捉えた報告は少ない。今回、日本臨床整形外科学会では骨脆弱性骨折を主要なアウトカムとして挙げ追跡調査を企画した。本学会では開始時調査結果について報告する。

【対象および方法】整形外科に通院する患者に対し、骨塩量の測定、機能テストおよびアンケート調査を行った。アンケート調査はロコモ5指数、つまずき、転倒歴およびバランス関連症状である。尚、骨脆弱性骨折は7種類に分類した。解析はSAS software version 9.3を用いた。

【結果】男性135名、女性667名平均年齢は $81.0 \pm 4.3$ 歳であった。中高年以降に経験した骨折は40.5%に認め、脊椎が15.3%、肋骨6.9%、骨盤周囲0.7%、大腿骨4.4%、膝2.7%、上腕2.6%、前腕9.1%その他の骨折10.3%であった。YAM値(測定法を限定しない場合) $68.4 \pm 15.6$ で、TUGは $12.9 \pm 6.5$ 、右片脚起立 $14.1 \pm 18.2$ 、左片脚起立 $13.3 \pm 18.2$ であった。身体特性は身長 $149.8 \pm 8.1$ 、体重 $51.2 \pm 9.1$ 、下腿周囲径は $32.1 \pm 3.1$ であった。疼痛VASスコアは $3.8 \pm 2.5$ 、ロコモ5指数は $7.5 \pm 4.9$ であった。既存骨脆弱性骨折の種類の数に相関する因子は年齢および性別を補正した結果、過去1年間の転倒、要介護度、ロコモ5指数、右片脚起立、バランス関連症状、およびYAMの順であった。

【結語】今回の開始時調査で中高年以降に発生した骨脆弱性骨折の部位別発生頻度が明らかになり、既存骨脆弱性骨折の危険因子を解析した結果、骨塩量のみならず四肢バランス機能を含めた運動器機能不全も重要な危険因子あることが分かった。今後、1年間の追跡調査を行い骨脆弱性骨折の危険因子を探索する予定である。